

//REPORT//

令和 6(2024)年度 第 3 回ユネスコスクールオンライン意見交換会
2025 年 1 月 16 日(木)16:00-17:00 開催
「学校の枠を越える国際交流 ～実践事例から学ぶ挑戦のヒント～」



ACCU 内ユネスコスクール事務局では、令和 2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を年に数回のペースで実施しています。今年度第 3 回は、「学校の枠を越える国際交流 ～実践事例から学ぶ挑戦のヒント～」と題し、23 名のご参加申込のもと開催しました。

■ プログラム

開催日時: 令和 7(2025)年 1 月 16 日(木) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	オープニング 趣旨説明 ACCU教育協力部 部長 大安喜一
16:05	「学校の枠を越える国際交流 ～実践事例から学ぶ挑戦のヒント～」 岡山市立操南中学校 教諭 教務主任 総合/SDGs主任 竹島潤氏 内容: 国際交流の実践事例をできるだけ多く紹介します。いろんなスタイル、文脈からできますよ。まずは先生自身が楽しく・熱く・優しく！そうすれば…ムフフ…世界と繋がりますよ！
16:25	コメント 北海道教育大学函館校 准教授 石森広美氏
16:30	ディスカッション 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:50	振り返り グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します(良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと等)
17:00	クロージング

■ ご発表

以下、竹島氏によるご発表の概要です。

本日の発表では、どういうリソースを生かしながら、どんな国とどんなテーマで取り組みをしているか、今勤めている岡山市立操南中学校でこの3～4年の間に取り組んできた7つの事例を紹介します。

1. International Meeting は、これまで勤めた学校で対面またはオンラインでずっと続けています。地域に住んでいる留学生、あるいは海外に住んでいる友人・知人を集め、海外ゲストと中学生が交流する取り組みです。2. 日中青少年交流、3. ウクライナ緊急支援プロジェクト、4. トルコ南部大地震緊急支援プロジェクト、5. 日タイ交流実行委員会は、[ACCU の教職員交流プログラム](#)への参加や自身が所属するNPO でのご縁で繋がり、そこから支援や連携のプロジェクトに発展させていったものです。6. パレスチナ・ガザ実行委員会は、今起きている非常に大きな社会課題ということで、色々な関係者と繋がって取り組んだものです。7. フィリピン・ミンダナオ子ども図書館は、私の亡き曾祖叔父が戦死したミンダナオ島を、平和教育の視点で訪ねるところから発展した取り組みです。このような取り組みをざっとお伝えし、最後にリソース・位置付け・波及効果について触れたいと思います。

私自身は、初の海外が大学3年生の時で、アメリカのオクラホマ州でした。その年にちょうど9.11のテロが起き、自分は外国人の立場で米国本土にいたわけです。その際、「パールハーバー」とか「カミカゼ」という言葉がひたすらテロップに流れる様子を見て、やはり世界と学び合い、生きざまを繋ぐということは大事だな、ということに気づかされました。

その後、アメリカのサンノゼ州立大学に留学しました。英語の教師ですので、アメリカをはじめとして欧米圏に関心が強い20代でした。その後、JICA のプロジェクトでネパールを初めて訪問してからは、欧米圏だけでなく、より広い視点で発展途上国、アジア・その他の国々へも関心をもつようになりました。

JICA の教師海外研修というプログラムに参加し、平成23(2011)年にネパールを訪れた際、友人の任地に行って日本祭を企画・開催しました。帰国後、在職の学校でこの日本祭を教科横断のプログラムにして英語と美術の授業でタイアップして実施したところ、生徒の反応が非常に良く、各教科への取り組みも促進されていったことから、やはり教師自身が国際経験を還流させるというのは大きいなと思い、どんどん取り組みを進めるようになりました。

先日は、文部科学省の日独青少年指導者セミナーでドイツに行ってきました。このセミナーは、メディア教育や主権者教育をテーマにしたもので、先進国や各国で今最も大きなテーマとなっているメディア教育の実践を交流するという場でした。帰国後、ドイツでの経験を踏まえて現在色々取り組んでいます。また、その時の友人や現地の先生が、2月に地元の岡山県で開催されるはだか祭りに参加される予定です。このように、色々なご縁を趣味と授業実践と学校間交流というように、様々なことに繋げていくというのが私のやり方です。

岡山市立操南中学校は、岡山市内でも五指に入るぐらいの大規模校です。職員も80名近くおられますので、国際的な教育内容にどのように取り組んでいくかという時に、やはり教育目標や学年経営にきちんと位置づけがないと白けてしまい、なかなかみんな応援してくれないのではないかと考えています。ですので、そのような位置づけを重視しています。また、学区内に3つ小学校がありますが、それぞれの小学校での国際交流や地域交流には若干差があります。ですので、3つの小学校から集

う中学校で一氣に実践していこうと取り組んでいます。

本校は職員研修等で共通理解を図っていますが、教育目標「心豊かな自立した生徒を育成する」のもと、目指すべき自己実現力、社会性、共生力のうち、一番国際交流の取り組みに関わるのは共生力と位置付けています。共生力を 1. 地域や世界との繋がりを自覚・自分事化し、2. 持続可能な未来、社会づくりに向けて、3. 様々な人、多様な価値観やセクターを超えた人と協力・協働できる力、と定義し、この 3 点を高めていく取り組みを実施しております。この結果、生徒の力がどう伸びたかについては、外部評価指標を取り入れており、IGS 社の Ai GROW を使っております。Ai GROW には、気質診断と自己評価と 360 度の AI 補正が効いた客観評価が用いられています。また、本校の 1 年生がフィールドワークを行い、地域課題であるプラスチックゴミ問題を取り上げた取り組みに対して、令和 3(2021)年度に[国連の賞](#)をいただく機会がありました。当地域は、江戸時代に干拓が日本一だったため現在も田んぼが多く、そこで使われているプラスチック被膜の肥料殻が環境問題になっています。この問題を外部に発信しようということで、生徒たちがモザイクアートを作成しました。それを発表する機会をいただき受賞したのですが、この年が本校の生徒たちにとって非常に大きなターニングポイントになったのではないかと思います。

1. International Meeting

英語科の授業などで海外と繋ぐのですが、毎回全生徒の参加は難しいので、有志生徒を募って実施しています。NPO との協働事業にしており、夏と冬に 1 回ずつ行い、本校だけで行うこともあれば、市内の他の中学校に声をかけて行くこともあります。多い時は 30 名少々、少ない時は 15 名から 20 名ぐらいでしょうか。海外ゲストは、15 名から 20 名ぐらいが参加してくれます。海外ゲストをどこにお願いするのかというと、私自身 NPO 法人国際協力研究所・岡山(NPO ICOI)の代表理事を拝命しており、この団体のメンバーが海外経験があるため、現地で得た友人関係に依頼したり、その他プロジェクトで知り合った海外の方々にお声がけすることが多いです。加えて、東南アジアの国々の人たちとずっと協力し合ってより良い世界を作っていこう目標の下、私自身も Asia Mutual-Prosperity Memberships を立ち上げました。これは、任意のメンバーシップであり、フィリピンの友人が副代表で、アジア各国にメンバーが点在しています。それからもう一つ、高校生を対象にした地元の NPO 法人(こどもこくさいフォーラム岡山)があり、こちらで理事をさせていただいて高校生世代やその他のリソースを得たりもしています。

2. 日中青少年交流

時として、日本と少し難しい関係にあるというのが中国かと思います。そんな時こそ教育交流が重要であるということから、地元の友好協会と連携し、友好都市(洛陽市)の学校と当校とでリーダー交流会を実施しました。この時は、友好協会と連携することで国家体制が異なる国とも国際交流のチャンネルを開きました。また交流方法としては、最初は学年の委員や生徒会のリーダー交流を実施し、その後、リーダー交流で機運が高まってから学年全体の交流に持っていきました。ただこの時は互いに大きな学校で、当校も 8 クラス、相手校は数千人規模の学校でしたから、オンライン上でグループ

分けをしたり、相手校は選抜クラスがオンラインで繋がるというやり方をしました。このように、先方との打ち合わせも含めて対話を重ねていき、機運が高まったところで、全校体制で交流協定、教育協定を結ぶことになりました。ちょうどこの3月で3周年になりますので、近況報告と記念式典をオンラインで行う予定です。この記念式典も友好都市間の議員連盟の会長や友好協会をはじめとした関係者に必ずお越しいただいて、オフィシャルな位置付けを明確にするように努めています。同時に、現地に入って講演をさせていただく機会もありましたので、先方の関係者(大人)とのリアルな交流を通じて関係を築きました。そしてそれを持ち帰り、学校の全校放送で紹介したり、洛陽市は世界遺産の龍門石窟と牡丹が有名な町なので、校内に関連の展示をしたりしました。このように、たとえ大人、NPOレベルで実施したとしても公式報告会を必ず行います。報告会では、中学校での交流がどのように繋がった、中学生はこの取り組みでこんな学びを得たということを一般市民や関係者に発信しています。これによってさらに付加価値が高まると考えています。

3. ウクライナ緊急支援プロジェクト

次に、ウクライナとの交流ですが、前述のような国際交流を重ねていくと「先生、ウクライナの危機に何かできないのか」と生徒もだんだんと目が肥えてきます。当初、ロシア・ウクライナ両方からの関係者との交流を模索したのですが、なかなかロシア側とのチャンネルが開けなかったのが、ウクライナの方との交流になりました。この時は地元の小学校や公民館等に募金やPR活動を行いながら、とにかく1日でも早く戦争を終わらせて平和をという願いから、実行委員会を立ち上げました。その結果、全校で100名以上が集まり、大型実行委員会体制となりました。先導したのは1年生でした([ニュース記事](#))。これが複数学年での[講演会](#)に繋がったり、元々学校で取り組んでいたモザイクアートが、平和祈念というテーマのもと、学校行事と連動させた取り組みになったりしました。また街中で、他の高校や市民団体が実施している取り組みがありますので、街宣に出かけて行ってPRをしたり、参加したり、情報を入手したりしながら、ウクライナから避難して来られている岡山在住の方とのネットワークを作りました。また、在日ウクライナ大使とのご縁を得ることもできました。このように、本校は大規模校なので、基本的に実行委員会が中心となって動き、それを学年や全校に下ろしていくパターンが多いです。NPOや市民運動と繋げることもあります。

4. トルコ南部大地震緊急支援プロジェクト

このように取り組みを進めていくと、今度は「トルコで大地震があった。何もしないで良いのか、どうするのか。」と生徒に問うと、「先生、何かしよう。」と反応が返ってきますので、まずはまたチャンネルを探し、繋ぐ作業に取り掛かります。この時は最も被害の大きかったトルコのガジアンティプ出身の友人を通じて現地情報を得たり、ライブで入ってきた動画を子どもたちと見たり聞いたりしながら、義援金のプロジェクトを発足させていきました。また、子どもたちはオリジナル封筒を作ったり、応援メッセージを寄せ書きしたりして、トルコの方にお預けする贈呈式も行いました。この活動全般を在名古屋トルコ共和国総領事にお伝えし、日本トルコ間の友情を再び育んでいくという誓いを立てました。

5. 日タイ交流実行委員会

タイとの交流については、[ACCU の教職員交流プログラム](#)で知り合った友人と、まずは自分の授業で作品交流を行いました。この時は総勢 550 名が参加して、1 人一つずつ英語でグリーティングカードを作って交流しました。

このようなネットワークは教育交流会等に参加することでどんどん得られます。私はタイ国政府日本教職員招へいプログラムの募集案内を見て、ぜひ参加してみようということで応募しました。

その後、現地での活動や写真を授業で取り上げ、気運が学年に広がっていったな、というところで実行委員を限定 20 名程度で募集しました。800 名以上生徒がいたら、「家族がタイで仕事をしています」という生徒や、「この前タイに行ってきました」といった貴重な経験をもった生徒が出てきました。こちらから発信することによって、そのような生徒の発掘が引き起こされます。また、そのような経験がある生徒は、やはり根底では何かしたいと思っていることが多いので、そういう子に火をつけて一緒にやっていくのも大切だと思います。

次に、学年代表のオンライン交流会を行いました。1 回目は思った以上に相手校の熱量が大きく、日本側が圧倒されましたが、これまでもこのようなパターンが多く、生徒も次は頑張ろうということで次回に継続されます。その後、北海道の高校の先生とも協力し、岡山と北海道とタイとで、最終的にはトリプル教育交流協定の締結に繋がりました。交流を通じ、3 校が相互に記念品を交換したものをそれぞれの学校で展示しています。もうすぐ 1 周年を迎えますから、1 年アニバーサリーを実施する予定です。

6. パレスチナ・ガザ実行委員会

実行委員会を設け、学習会のスタイルで始めました。やはりテーマが非常に難しく、中学校 3 年生でも国際情勢や地理を詳しく学んでいないということだったので、まずは意識が高く、関心がある生徒から始めようということになり、メンバーを集めました。知見の深い方々が学習会の講師を務めてくださり、非常にレベルの高い内容を学びました。すると生徒から、「学んで終わりではいけない、どうするか」ということで、実行委員会で特別展示をしたり、全校放送をしたり、給食時間にスライド放映したりと、全生徒へ発信していきました。実行委員は一連の活動に非常にやりがいを感じ、学んだことをもっと伝えたいと、一般生徒を対象として学期末等に図書館で学習会を主催しました。こうして子どもたちの主体性や企画力も高めていくことを大事にしています。

また、こうした取り組みをしていることを関係者に伝えること自体、私は連帯の意思を表すと思っています。パレスチナ・ガザに関し、広島で市民運動を行っている方がいらつしやることを知り、広島に向いた時の様子を学校に展示させてもらったり、逆に広島で活動している人たちに「中学生も関心持っているよ、決して無関心じゃないよ」ということを伝えたりするようにしています。

その後何ヶ月か経過し、子どもたちがまた「先生、しばらくしても事態が変わらない。何かやった方がいいんじゃないか。」と発案があり、地元の岡山空襲の平和追悼の式典に合わせる形で、第 2 期パレスチナ・ガザ実行委員会がスタートしました。この時は、地元の商店街で行われた平和祈念のイベントにパレスチナをテーマに出品しました。ウクライナや広島、長崎、千羽鶴というテーマがたくさんあ

る中で、パレスチナは政治問題化するのを恐れてなのか、あるいは日本と他国との関係性を恐れてなのか、おそらく本校が唯一パレスチナを表面に出していたと思います。誤解のないように申し上げますが、これは政治的イデオロギーでどちらの味方とかそういう問題ではなく、現時点でより多くの一般市民が困っているという視点から、子どもたちがイスラエル側の関係者とパレスチナ側の関係者双方から話を聞いた結論として、彼らがパレスチナのピース・コミッティとしてやりたいということで、支援しています。パレスチナ国旗の色で千羽鶴を全校生徒 1 人 1 羽作ってもらい、それを実行委員みんなで繋ぎ合わせるという取り組みでした。このような活動をしていると、ぜひそういう子どもたちに話したい、ということで、広島で知り合ったレベッカさんにお越しくださることになり[講演会](#)も行いました。

7. フィリピン・[ミンダナオ子ども図書館](#)

マニラでの国際教育フォーラムにて発表する機会をいただき、フィリピンとの縁が一気に広がりました。ミンダナオ子ども図書館(現地 NGO)の方の思いに心打たれ、帰国後何かできないか、ということで中学生の交流事業を始めました。ミンダナオ子ども図書館の子どもたちと 1 人 1 枚グリーティングカードを作成し、交換する取り組みを行いました。

教育実践や現地活動、国際交流については教師自身も必ずアウトプットするべきだと思っています。私も NPO 等、様々なチャンネルからどんどん発信しています。また、刊行物やニュースレターがありますので、機会をいただいたら発信し、実践報告する場もなるべく使うようにしています。

例えば、ミンダナオ子ども図書館の代表を岡山に招いての講演会を考えています。また、広島の平和教育もご縁があり、パレスチナの活動を発表する機会をいただきました。タイの件も、独自で地元行政のご縁を活用しながら取り組みを発表しています。以前は ACCU の発行物でも発信しました。今振り返ると、教師自身が国際交流を楽しんで教育活動に生かす、あるいは様々なチャンネルがあるということは、子どもの学びに繋がると思います。よく言う、「教師こそが子どもにとって最大の学習環境、教育環境の一つだ」ということです。

生徒とも地元の NPO 主催のイベントと一緒に登壇し、生徒に「こんな学びをしたら多文化共生というものについて自分にはこんな考えができてきた」と、これから先を見据えて発信させたりもしています。また平和については、やはりユネスコ協会が大変熱心に取り組まれていますので、そこでも発信をしています。

【総括】

挑戦をするにあたり大事なのはやはり、国際交流が自校の目指す生徒像とどういう繋がりがあるのか、総合的な学習の時間なのか、人権教育なのか、教科なのか、学年行事なのか、どことどういう繋がりで実施していくかということを校内できちっと提案し、学校長をはじめ教職員に理解していただき、賛同いただくことが重要かと思います。また、学校の枠を超えたりソースというのも規模がありますので、国連、外務省、大使館レベルなのか、あるいは国内組織も含めて大きな組織や県・市レベルなのか、または地元協会や NPO、留学生など、どこに狙いを定めるか、どこを活用するのかということも重要かと思います。

それから現地活動や取り組みは必ずアウトプットする、できれば公的な意味づけをすることも重要です。子どもや保護者、誰が見ても、「良いことしているな」「素晴らしいな」という有用感が高まるような発信を心がけています。

また、国境を越えて知り合った友人とは、本当に困った時に何かするのが真の友人、A friend in need is a friend indeed とよく言いますが、災害という国境を越えた人類の共通課題、あるいは紛争といった時こそ連帯の意思を表明するというのが国際交流の一つの実践としても大事な視点かと思います。

最後に、〇周年とか、イベント的な部分も非常に重要です。国によっては非常に重視しますので、そこも大事にしながら取り組みを続けています。ちょうど昨日、職員会議で提案が通りましたが、中国・洛陽市東昇第二中学校との教育交流協定締結 3 周年記念行事、タイ・ソンナン中学校および北海道・置戸高等学校との教育交流協定締結 1 周年記念行事、さらに先日中学生大使を引率して行ってきた上海での交流事業の事後活動と、このように毎回提案し、教職員皆さんに了承をいただいた上で行っています。

■ コメント

以下、石森氏によるコメントの概要です。

ご発表を聞いて、先生のパワーに圧倒されております。パワフルでアクティブな先生だからこそ大規模校をどんどん牽引し、生徒たちを主体的に変容させる、やはり教師がその鍵を握っているということを実感していると感じました。

私も 30 年近く国際理解教育に関わり、ユネスコスクールにも 8 年間勤めた経験があります。ユネスコスクールはユネスコ本部に登録されており、学校のモットーにユネスコの理念が入っているため良いのですが、公立の先生は転勤するので、必ずしもそういう土壤がある学校に勤務するとは限りません。その中で国際理解教育に熱心な先生方は常に孤独に戦っているというケースが多く、教員も様々な考え方を持っている集団ですので、共通理解が得にくいという状況があります。そのような中、熱心な先生方は小さなことから取り組むということで、まずは自分の学級や教科から実践し、クラブ活動や生徒会といった組織に広げていき、最終的には目指したい生徒像や校訓と絡ませたり、国際理解やユネスコの理念を総合的な学習の年間計画の中に入れたりして、共通理解のもとに様々な教科や取り組みを統合し、ホールスクールで実践することを理想としています。

私は孤独に戦っている先生たちをたくさん見てきて、色々な場で励ましてきましたが、先生は教務主任というお立場もあり、学校運営の中にそういったユネスコの理念を持ち込めるお立場というのが強く、アドバンテージがあるな、と思いました。目指したい生徒像の中に共生力とうまくリンクさせながら、ホールスクールアプローチに広げており、まさに学校の中に位置づけるところが成功している例であると感じました。

もう一つ注目したのは、普段の様々な取り組みが積み重なり、その蓄積の成果だと思いますが、生徒たちが主体的に動き始めているというところが、まさに教育の成果を生徒自身が示してくれていると思います。やはり国際理解の大切さというのは、教員は仲間を増やそうと思って一生懸命語るのです

が、なかなか簡単に理解が得られるわけではありません。しかし、生徒たちが変容する、生徒の意識が変わる、生徒の行動が変わる、生徒から動き出す、というように、学習者が教育者の理念やメッセージを感じ取り、その行動や認識に変容が出てきた時に、周りの教員は、素晴らしい教育実践だと認め始めます。

委員会組織を立ち上げ、あるいは先生が普段から色々な種蒔きをされているからだと思いますが、何か災害が起こった、紛争が起こったというような時に、何もなくて良いのかというメッセージ、中高生でも、あるいは小学生でも何かできることがあるのではないかと、行動したいと思うような気持ちを掻き立てる教育実践、これが非常に価値のあることだと思います。

やはり国際理解やユネスコの理念もそうですが、知識の蓄積では社会は変わりません。より持続可能で平和な社会にしていくために、どのように自分の行動や生活の中で表現していくか、アクションを起こしていくか、ということが重要だと考えます。本日のテーマは国際交流でしたが、交流の域を超え、交流するだけではなく、やはり社会の問題に対して、児童・生徒自身がどのように解決する糸口を見い出していけるのか、つまり、国際理解や地球市民の様々な研究や実践の中で繰り返し出てくるのは、やはり行動する力、そしてローカルとグローバルを繋げる力です。本日のテーマは「国際交流」でしたので、先生のご発表は国際的な内容が多かったと思いますが、地域の課題とグローバルな課題が繋がったり、実は同じだったり、そういった地域とグローバルの往還というのがあって、私達の身近な生活の中にグローバルな課題があり、それに無自覚のままに加担していたりということがあります。ユネスコの理念には地域の課題も解決していく、という目標もありますので、ローカルとグローバルがうまく繋がっていくと良いな、と思いました。

それから人権、平和、開発といった恒久的な 이슈 以外にも、トルコの地震やガザ、ロサンゼルス
の山火事といったタイムリーな 이슈 があります。ガザについては勉強会を開いたこと素晴らしいと思います。このように、恒久的な 이슈 だけを机上で勉強するのではなく、目の前のことに対しても何かできることがある、と模索してすぐには行動を起こすというところが、まさにユネスコが求めている、そして地球市民に求められている方向性に合致していて、感銘を受けました。

私がずっと思ってきたのは、小・中・高と、そのような教育が繋がっていけば良いということです。生徒たちが中学校で得た意識を、高校に送り出した後でも発展させることができるか。生徒たちの中に芽生えた気持ちが小・中・高の段階を経て発展し、その灯が消えないように接続していったら良いと思います。この縦の連携を作るという意味でも、先生が色々な地域に出られて様々な組織と繋がることで、その役割も果たせるのではないかと期待しております。

参考：[「生きる力」を育むグローバル教育の実践―生徒の心に響く主体的・対話的で深い学び](#)

■ 振り返り

以下、ディスカッションにて話し合われた主な内容です。

- 色々な活動に参加する際の語学力に対する不安について、やはり英語以外の教科の先生が参加することこそ意味があるため、語学に関する壁をできるだけ感じなくて済むように、例えば通訳が入るプログラムからチャレンジしてみてもどうかとアドバイスいただいた。

- 国際交流のメリットを管理職の先生が感じることで、学校の中で広めていくことができるのではないかと。また、教員が熱量をもって国際交流に取り組むことも大事である。
- 竹島先生と同じグループだったため、以下についてお話しいただいた。
 - ・ 教員の負担が大きいのではないかという問題意識に対し、ノウハウとして、教務主任や管理職がメインかつ教員公募型で交流を進め、その実施データを蓄積して次の担当者に引き継ぐと良いということを教えていただいた。
 - ・ 交流の際に壁となる言語については、事前準備が重要であり、お互い質問事項を共有しておいたり、通訳が入る場合には原稿等を交換しておくのと良いとのアドバイスがあった。また、教科との横断・連携というところでは、事前に相手国について調べ学習ができると良いということであった。
 - ・ 交流がうまくいかなかった事例として、理科の時間に連携先の学校の求めるスキルが高く、なかなかうまくいわずに頓挫してしまったという話があった。
 - ・ 地域の自治体との繋がりに関して、どうしても学校代表者のみなど、関わる人数が少ない中で、どのように継続的にたくさんのメンバーが関わっていけるかについては、NPO などを通してやっていくと良いという話があった。
- 本校の取り組みについてお話しした。
 - ・ アメリカ、韓国、中国と交流をしており、密に連絡をとることを大事にしている。アメリカの学校とは互いに 2 日以内にメールの返信をするというルールがあり、初めは厳しいと思ったが、実は大変功を奏している。また、メールだと相手を読んだかどうかかわからないため、韓国の先生とは LINE で、アメリカの先生とは Messenger で繋がり、読んだかどうかを確認している。読んでいない場合は何度もメッセージを送っており、そうすることで、どんどん交流が継続的に広がってくる。
 - ・ 初めは自分一人で国際交流を始めたが、生徒がどんどん変容する様子を周りの先生が見ることで、だんだんと認めてくれるようになった。国際理解部という部活動も最初は 3 人しかいなかったが、口コミで広がり、今は 72 名、学年の 3 分の 1 程度が所属し、交流を楽しんでいる。
 - ・ 本校が持っている繋がりを県内の他の学校にも共有するべく、zoom ミーティングをする時には他校にも参加を呼び掛けている。
- 探求の時間に平和学習等を実施している学校があった。
- 本校の取り組みについてお話しした。
 - ・ 「学びの多様化学校」として指定されているため、学習指導要領にとらわれずに学習のプログラムを組める。ユネスコスクールとして、ユネスコの理念のもとに授業を組んでいる。
 - ・ 国際交流フェスティバル [SEISA Africa Asia Bridge](#) の実施に向けての事前学習等を行っている。スーダンの学習では、南スーダンとスーダンがあることや、内戦や紛争がある国だが、一方で、実は世界で一番ピラミッドが多い国だということ等を学んでいる。

る。全国のユネスコスクールや興味がある方たちに参加いただきたい。



[オンライン意見交換会の様子]

※オンライン意見交換会に関し、お申込み方法などの詳細は、[ユネスコスクール公式ウェブサイト](#)内「最新情報」、[ユネスコスクール公式 Facebook](#)に掲載中です。ぜひご参加ください！